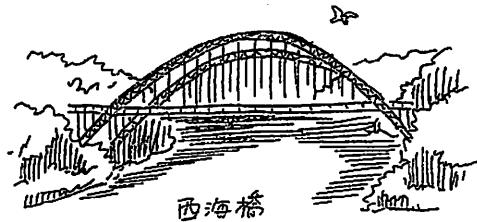


おはようございます

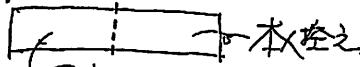


分科会は9:00からせまります

お泊りの方は

それまことにお部屋のつけ、チェックアウトをお願いします
フロントへお越(下さり)、カギを返して下さい
荷物はお持ちにて分科会会場へおけ下さい。

お弁当券は分科会ごとに集めます。



回収用

お盆にはいら分科会ごとにお弁当を
本人控えと交換します。
忘れずにお持ち下さい。忘れなくし...よろずお詫び本部へ。

帰りの交通機関について

16:20のシャトルバスをご希望の方は
16:10に玄関にお並び下さい
この件はのらまくわしくお伝えします。

講演者・不登校やひきこもりのつどい
こもつじについて、当事者や
家族、支援者と共に考える
「第24回全国のつどい」
長崎」が31日、佐世保市内
のホテルで始まった。記念
講演で元夜間中学教師の松
崎道之助さん(73)は「SOS
を出す勇気を持つてほ
い」と呼び掛けた。

佐世保市のNPO法人
「フリースペースるぎのと
う」などでつくる実行委が
主催。県内での開催は8年
ぶりの度田澤田修実行委
員長は、「いろいろな思いや
苦しみを出し合いで、共に悩
んでほしい」と語った。

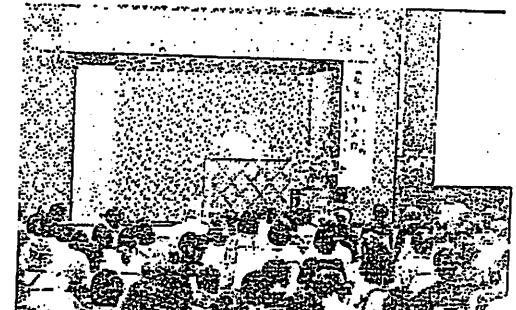
松崎さんは、「できないと
きは助けてと言ふ勇気を持
つてほしい。言われた相手
もうれしい気持ちになる」
と説明した上で、「学校では
SOSを出す能力を育てるら
れない。命や魂を守る
ためには『助けて』を人々
と言える教育が必要」と訴
えた。

ついには374人が
加。1日まで2日間、△小川
学・高校・障害のある子ども
もの登校拒否・不登校や進
路や自立△家族の役割△医
療との関わり△ひきこもり
など△のテーマで分科会
を開催し、それぞれの立場
で思いを語り合つ。

ウラ面に
講演要旨
あります。

「SOS 出す勇気を」

佐世保 全国不登校・ひきこもりのつどい



講演者・不登校やひきこもりに関する「全国の
つどい」の記念講演
佐世保市鹿子前町、九十九島ベイサイドホテル
&リゾートフラックス(山下哲朗撮影)

東京の夜間中学で33年間
勤めた松崎さんは、「私とい
う人物ともに生きるまな
ざしから」と題して講演。不登校
を経験した若者が、女性に「漢字を教えてほ
い」と頼まれて教えたこと
をきっかけに「学校に行き
たい」との気持ちが芽生え
たエピソードを紹介した。



記念講演 松崎運之助さん

「私という宝物 ともに生きるまなざし」 要旨

・励ましを受けると、元気になる。

だいぶ前になりますが、私も励ましを受けて元気になったことがあります。ある日曜日のことですが、私は入学希望の生徒さんの相談を受けることになっていました。約束の日、重い足取りで駅を出ると、若い子が座り込んでいました。派手なシャツにサングラス、そして中身が見えるようなジーパンを履いていました。皆その子を避けており、私も約束があったので急いでいました。するとその子が立ち上がりて私を呼んでいました。その子は、中学校を卒業して以来行方不明だった子でした。私は急いでいたので「地元にいるなら学校に寄れよ」と言って歩き出すと、「うんちゃんも大変だね」と声をかけてくれました。かつて学校にいた頃は自分勝手で周囲に溶け込めなかつた彼が、しばらくの年月を経て私の前に現れ、励ましを送ってくれたことから、学校を卒業して彼なりにいろんなことがあってああいう人間になったんだな、と感じ、人間にはいろんな成長があるのではないか、と思いました。

・人間は1日に約9000回の選択をしている。

どの選択肢をとるかは、その人自身が選択します。法律で決まっているわけではありませんから。人間は1日の内で日常生活に関する選択を約9000回、無意識に繰り返しているらしいです。学校や社会が、法律が、ではなく私たちがそれぞれ自らの意思で判断しているのです。皆さんも3000回くらいは決断を繰り返しているはずです。登校拒否や不登校、ひきこもりといつても、成長が止まつた、暗いものを抱えている、といったようなイメージを持たされているかも知れませんが、身体は育っています。閉じこもっていても、引きこもっていても人間として成長しています。選択をしたとき、あの時あすれば、などと悩みだすときがなく出でますが、良かったか否かという結果は出ません。なぜならどれを選ぶだけの話だからです。

・作文「学校とは、嫌悪の対象でしかなかった」

『この学校に来る以前、学校とは嫌悪の対象でしかなかった。行きたくはなかったけど、周りの人に行くので仕方なく行く。中学校1年の時いじめに遭い、学校を休みはじめた。夜間中学校に行くようになつてもちゃんと通えるか不安だった。夜間中学校はその不安を吹き飛ばしてくれた。さまざまな事情で学校に通えなかつた人たちがいて、私にとっては新鮮だった。ある人が言った、「学べるっていうのは本当に幸せなことなんだね」という言葉を聞き、それまでは学べることが当然だと思っていたけれど、学校に行けることがとても幸せなんだと感じた。』

・若者と高齢者の、学校に対する温度差

夜間中学校に不登校、登校拒否の若い子が入ってきますが、若い子たちの学校に対する懸念感はものすごく強い。「夜間中学校に行ってみよう」とは思って来ても、「もしかしたら気持ちが休むことがあるかもしれない」と淡い期待で通つて来る。一方で、年配の人たちは学校は「憧れの場所」であり、読み書きができずに馬鹿にされた悔しさや読み書きができることへの憧れがある。しかし、若い子にとっては学校は絶望感、不信感の場所であり、一つの教室の中に絶望感と憧れが机を並べる。

・見た目は問題の氷山の一角

夜間中学校にビル掃除の仕事をやっている子がいました。その子は授業の時一番前に座っていましたが、ガムを噛んでいました。頭に来て「なんでガムなんか噛むんだ、授業中にいい加減にしろ」と言うと彼は「俺は疲れてんだよ」と言ってきました。「お前の仕事といえばビルで掃除だ、モップ程度じゃないか」と反論すると、「俺の仕事がそんなに楽かってなんでわかるんだ」と反応しました。翌日、彼と同じことをすると、学校とは違う、くそみそに怒鳴られることが当たり前の環境で、怒鳴られることに免疫がなくなっていた私は疲労で彼が起こしてくれるまで寝込んでしまいました。小さな教室で授業が始まると、私が教卓に行くと、皆の顔が歪んで見えた。しかし、私はプロの教師であると矜持を持っていたため、1時間目で先生が寝た、ということはどうしても阻止したかったのです。その結果私は「ガムにすがりたい」と思ってしまいました。そして私がガムを欲しがると彼は『授業中ガムはいけないんじょ。先生、言つときますけどいろんな人がいる集団生活ではマナーが必要なんですよ』と言われてしまつた。

・命を削って輝かせていた光

教育実習では、鉛中毒にかかっている生徒がいました。「学校に行かないとい死んでも死に切れない」と無理をおして学校に来ましたが、無理がたたってついに倒れました。教育実習の時、その人の目をみてキラキラしている素敵なおじさんでしたが、それは命を削って輝かせていた光でした。うかつにも、その人が倒れたときに初めて気がつきました。

・まとめ

悩むことが多いと思いますが、熱い志の原点に戻つて見ることも大事かなと思います。
今回の話をこころに自分のこころに響かせることができた皆さんが素晴らしいと思います。

(文責、事務局)